

まだらに生きる

——究極の解決策——

杉本安紀枝*・吉田 裕午**

Living in Marble (MADARA)

—— A Final Solution ——

Akie SUGIMOTO and Yugo YOSIDA

You may have a feeling that the theme of "Living in Marble" is somewhat wild. But it's a final solution toward the question that everything is different and good, or neither truth nor justice is unique. Defining "MADARA" and viewing from "MADARA", we analyzed many phenomena contrasting with classics. "MADARA" have also given the good model of five steps of knowledge and is specially applied to the last step.

キーワード：まだら、生きる力、真正、ユニバーサルデザイン、ポートフォリオ評価、間、フラクタル、線り込み、曼陀羅、アフォードダンス、リベラルアーツ、シンメトリ、メタファ、足場かけ、メディアリテラシ

1. はじめに

「まだらに生きる」というテーマは、少し突飛な感じがするかもしれません。実は、筆者自身もはじめは、つかめたようですとすりぬけるような感じがよくありました。「生きる力」は、学校教育でも、総合学習などで話題となり、問題発見や問題解決能力の育成が叫ばれていますが、基本となる教養概念が今ひとつはつきりしないように思います。

たとえば、「みんな違って、みんないい（金子みすゞ；私と小鳥と鈴と）」と、「みんな同じ（ノーマライゼーション概念）」は、矛盾しないのでしょうか？指導者のいう真実や正義は、実際は、1つでなくていっぱいあるような気がしています。それがいいのでしょうか？幸福や生

きる意味は、映画 AI. や絵本ピノキオやサンタクロースの話とは断絶しているのでしょうか？情報の情は、迷いという意味もあるようですが、情報の大海原の中で私たちは永久に迷い続けるのでしょうか？

どれも大きなテーマなのに、知識中心の教育のやり方では、自分にわき起こるこのような疑問や答えを取り上げてくれない印象もあります。もちろん、自分で解決しなさい、あるいは、そうするものといわれれば、何事もそうですが、「まだら」から見直す（これを杉本は卒業論文で「観」とよびましたが）ことも大きなヒントになります。

2. まだらの定義

杉本は、卒業論文の中で、まだらの性質を次のように列挙しました。

* 初等教育学科19期生

** 本学助教授

○お互いの性質が変わるように、混ざること
はない。一方に支配されない。支配しない。(自
己同一性)

○常にうごめいている。目に見えなくても変
化がある。何かが生まれる前。(動的、胎動)

○遠いものとの関連がある。(長距離相関)

実は、人工物以外は、特にイノチについては、
まだらの性質が多くあてはまり、発想が拡がり
ます。それを学校で正面からとりあげた話は、
例外的で、鳥山敏子の「ブタまるごと一頭食べ
る (フレーベル館)」などがありますが、徹底
したフォローが大切でかなり際どい取組みとい
えます。このような真正の (authentic) 実践の
意味は、生きることの再認識にあります。

自己同一性の意味は、固定的な個性とは、
筆者たちの感覚では、少しニュアンスが違いま
す。競争のみの縄張り No.1 に支配されたイ
メージではなく、もっと別のモデルを通して、
自然界に共生の姿を学ぼうとしています。聞いた
ことがあると思いますが、人間の体にはたく
さんの微生物が共生し、発酵食品の恩恵にもあ
ずかり、エネルギーの源として、進化の初期の
頃からずっと、ミトコンドリアと人生の時を共
に過ごしています。環境 (動植物の分布) をみ
ても、自然界の調和は、みごとな「まだら」模
様を示しています。人間社会もそれを見習って、
誰もが住みやすいユニバーサルデザインが提唱
されるようになりました。民族・宗教対立をは
じめとする国際紛争の解決策もこのあたりの考
え方にありそうです。

動的なイメージ、概念も既にいくつか知って
います。一つは、循環 (リング、波) です。季
節と同じように、モノは揺れながら、ある範囲
の運動を繰り返すことが多いものです。その波
の三角形の中に、誕生と死をとりあえずのせて

みるのも次のきっかけになりそうです。

自己同一性と動的変化を組み合わせた発想法
に、古くは陰陽道があります。昼と夜、男と女
など、対等の関係で循環を繰り返しています。
また、循環に発展を組入れたイメージにらせん
(渦) があります。経済、文化は螺旋的に発展す
るという説や、教育、発想法にも螺旋的な発達
過程を考慮に入れようという動きもあります。
PDCA (Plan, Do, Check, Action) サイクルは
有名ですが、実行行動過程とともに、内省評価
過程を次の発展のための必須条件としています。
これを取入れたものに最近話題のポートフォリオ
評価があります。

このあたりまでのイメージは、今までどこか
で聞いたことがあると思います。ところで、最
近の出来事に関連し、課題というか、次のよう
な疑問が湧いてきます。物事は常に発展してい
るのだろうか？ 誕生や死 (減衰) や他との相互
作用はどう取入れて考えればいいのか？
今までの自分や人類の歩みに誤りはないのだろ
うか？

孔子はいいことをいっています。「学びて思わ
ざれば則ち罔し (くらし)、思いて学ばざれば則
ち殆し (あやうし) (論語)」鏡を見て、自分を
修正するのはいいが、自分をなくすほど見る必
要はありません。脱没個性や批判批評精神は、
当然唱えられていいけれども、バランスの問題
であり最終的な解決策にはなっていません。

ここで、本学秋山先生の授業でいきなり、本
で読んだ「十牛図」が想い起こされます。思い
立って (発起し) 自分さがしの旅にでて、悟っ
て暮らす過程の途中にある「空」の思想にも通
じるようですが、第8図 (人牛俱忘) において、
個と全体のひっくり返しともいえるべき間が存在
しています。第9図と第1図は第10図でつなが
り、私の由来を暗示しています。数学において

も、2回まわるとともに戻るメビウスの帯というのがありますが、二重のループになった構造を思い浮かべます。

捉えにくい「空」ですが、まだらでみると発想が湧いてきます。第3のまだらの性質、長距離相関もタネの発展形として捉えられます。「一即一切」「一切即一」というスケール変換による宇宙と個との同一性も、タネはもともと単純な点ではなく、多重に折り畳まれた「まだら」フラクタル（繰り込み）であったことを考えれば納得されます。

また、相変化と呼ばれていますが、物質界も姿が変わる時、離れたものとの相関が増すそうです。インターネット時代ですが、国際的にも情報交流は、地理的に離れている人たちとの連携を深め、eメールなどで距離がなくなる実感を持つ人も多いことでしょう。グローバル（国際）とローカル（地域）を合成した造語で、グローバルという言葉もまだらです。NPOやNGOも同様で、ライフワークや人生の過ごし方も多重になっていく感覚があります。

また、楽器や声や音の音響空間では、固有振動とか節腹といったまだらも存在しています。光も干渉して強いところ、弱いところが生じ、色も含め、ホログラムといった夢のような仮想の像すらつくることができます。このまだらは、少し条件を変えれば、ちょうど楽器のチューニングのようにコントロールができ、一気に様子を変えることもできます。杉本は、それを（タコが岩や巨大魚に化けたりするような）擬態にみました。これは、生命の知恵ですが、変幻自在というの、まだらの境地と考えられます。図は地から一時的に創られたものという表現も創世記にありそうな予感がしてきます。

さらに、構造的にみるとまだらは、フラクタルとよばれている繰り込み構造がそれにあたっ

ています。ちょうど遺伝子のように、小さならせんが、さらに大きならせんになり、何重にもなってループし、他の高分子ともジグソーパズルの関係にあります。また、このループは1本ではなく、複数が絡み合ったまだらの紐のようです。（物質をつくっている素粒子もこのような構造だといわれています。）まだらの由来は、一説には、曼陀羅という宇宙の図から来ているともいわれます。曼陀羅は、まさにグローバルな構造で示唆に富んだカタチ（金剛界曼陀羅と胎蔵界曼陀羅）をしています。

3. 「まだら」から見直す？まだら観

まだら観の出発を、似より観すなわち、ある種の共通性に着目した固定された分類のつながりに求めても有効性は変わりませんが、例外が主要な存在に成長するので、あえて先回りして、自由な発想の転換という見地から始めたいと思います。発想の転換といえ、アフォーダンスがコペルニクス的転回（天動説一色の中で地動説を唱える閃き）とよくいわれます。これは、情報は既に環境（地と図）の中にあった、という発想です。言葉を含め、固定した観念は相応しくなく、変化の多い時代には、知識がすぐ陳腐化してしまうことともつながっています。

まだらに観るには、対象から距離（間）を保って、ある種のスーパービジョンや遠近法を必要としています。芸術家は直感が優れているといわれますが、さらに意識的に、パースペクティブな直観を鍛える必要もありそうです。時空を統一したアインシュタイン、動植物形態が融合した粘菌にコトの重要性を悟った南方熊楠、平面に多重な空間を射影したピカソ、生活芸術として民芸やジャズを生み出した先人たち。まだらには、生命や宇宙から学んだ力があります。また、まだらは、従来の言葉が意味をなさない

世界にも有効な羅針盤となり道案内となります。しかし、これには、まだらをコントロールする因子について洞察と訓練を必要とするようです。まずは、大人と子どもという切実なまだらについて、思考訓練してみたいと思います。

訓練1 ピノキオは人間になれたでしょうか？

訓練2 サンタクロースっているんでしょうか？

千と千尋の神隠しを始め、宮崎駿アニメ作品は、大人にも子どもにも人気で感動を与えています。どこがその由来でしょうか？千と千尋の神隠しでは、生きる力をつけると文部科学省と同じようなことをいっていますが、内容は同じでしょうか？映画では、人のために何かをすることで、幸福や愛に目覚めましたが、これは大人も忘れかけていることかもしれません。生活に余裕が生まれると、文化的な充実感も求めます。今は、地位や身分、さらには人種すらスーパービジョンできる世の中になっています。時間軸をスケール変換したり逆戻りして、リセットのきくシミュレーションも映画などの中で体験できています。エイゼンシュタインのモンタージュ理論にある、ある独裁者の孤独を作品の映像効果から感じとるような訓練も早めに体験しておいてほしいことです。何度過ちを繰り返せばわかるのかという問いかけも、千と千尋の神隠しのエンディングの「いつも何度でも」の歌詞にありましたね。

訓練1は、幼児教育で主要な体験として重視されている絵本についてのフォローを含みます。絵本に込められた大人のメッセージはさまざまですが、人間と機械という状況設定で、ピノキ

オは多くの学びを子どもたちに与え、子どもたちの様態によって、いろいろな保育者の先を見越した臨機応変な対応を要請しています。映画A.I.のテーマでもあります。自己の脳の新皮質を含めた人工物の愛への接近の仕方によって、子どもに一番大切なことを示し、子どもや自らの生き方すら変えさせてくれます。そこには、これから人生で出会うであろう予告（将来からみればデジャブ）が含まれています。きっと成れた（成れる）と、夢を繋げる保育者・教育者になりたいものです。

訓練2の答えですが、百年以上も前の、アメリカのニューヨーク・サンという新聞の社説にのった（クリスマス小事典；社会思想社など）、それに対する答えの例です。これを排除する動きがあったら、科学万能主義や、教条主義など、どこかに社会の歪みを警戒する必要があるそうです。

きしゃさま

あたしは八つです。あたしの友だちに、「サンタクロースなんていないんだ。」っていつている子がいます。パパにきいてみたら、「サンしんぶんに、といあわせてごらん。しんぶんしゃで、サンタクロースがいるというなら、そりゃもう、たしかにいますよ。」と、いいました。ですから、おねがいです。おしえてください。サンタクロースって、ほんとうに、いるんでしょうか？

バージニア・オハンロン

ニューヨーク市 西九五丁目一一五番地

バージニア、おこたえます。サンタクロースなんていないんだという、あなたのお友だちは、まちがっています。きっと、その子の心には、

いまはやりの、なんでもうたがってかかる、うたぐりやこんじょうというものが、しみこんでいるのでしょう。うたぐりやは、目に見えるもののしか信じません。うたぐりやは、心のせまい人たちです。心がせまいために、よくわからないことが、たくさんあるのです。それなのに、じぶんのわからないことは、みんなうそだときめているのです。けれども、人間が頭で考えられることなんて、おとなのばあいでも、子どものばあいでも、もともとたいそうかぎられているものなんですよ。

～中略～

そうです、バージニア。サンタクロースがいるというのは、けっしてうそではありません。この世の中に、愛や、人へのおもいやりや、まごころがあるのとおなじように、サンタクロースもたしかにいます。あなたにも、わかっているでしょう。世界にみちあふれている愛やまごころこそ、あなたのまいにちの生活を、美しく、楽しくしているものなのだとすることを。もしもサンタクロースがいなかったら、この世の中は、どんなにくらく、さびしいことでしょう！あなたのようなかわいらしい子どものいない世界が、かんがえられないのとおなじように、サンタクロースのいない世界なんて、想像もできません。サンタクロースがいなければ、人生のくるしみをやわらげてくれる、子どもらしい信頼も、詩も、ロマンスも、なくなってしまうでしょうし、わたしたち人間の味わうよろこびは、ただ目にみえるもの、手でさわるもの、かんじるものだけになってしまうでしょう。また、子ども時代に世界にみちあふれている光も、消えてしまうことでしょう。

～中略～

サンタクロースをみた人は、いません。けれども、それは、サンタクロースがいないという

しょうめいにはならないのです。この世界でいちばんたしかなこと、それは、子どもの目にも、おとなの目にも、みえないものなのですから。

～中略～

この世の中にあるみえないもの、みるができないものが、なにからなにまで、人が頭のなかでつくりだし、想像したものなどということは、けっしてないのです。

あかちゃんのがらがらを分解して、どうして音がでるのか、なかのしくみを調べてみることはできます。けれども、目にみえない世界をおおいかくしているカーテンは、どんな力のつよい人にも、いいえ、世界じゅうの力もちがよってたかっても、ひきさくことはできません。ただ、信頼と想像力と詩と愛とロマンスだけが、そのカーテンをいつときひきのけて、そのむこうの、たてようもなくうつくしく、かがやかしいものを、みせてくれるのです。そのようにうつくしく、かがやかしいもの、それは、人間のつくったでたらめでしょうか？いいえ、バージニア、それほどたしかな、それほどかわらないものは、この世には、ほかにないのですよ。

サンタクロースがいない、ですって？

とんでもない！ うれしいことに、サンタクロースはちゃんといます。それどころか、いつまでもしなないでしょう。一千年のちまでも、百万年のちまでも、サンタクロースは、子どもたちの心を、いまとか変わらず、よろこばせてくれるでしょう。

これを書いたのは、フランシス・P・チャーチ (1839-1906) という豊かな想像力と暖かい心をそなえていた記者でした。

4. 間について

情報の情には、「迷い」という意味もあるそう

です。まさに、今は情報の海の中で、私たちは判断に迷い、何かに頼りたい気持ちも生まれています。温故知新、古典に学ぶこともこの際必要（リベラルアーツ）と思います。

東洋思想を仏教にみることもとても参考になります。般若心経は、正式には摩訶般若波羅蜜多心経（まかはんにゃはらみたしんぎょう）といい、「摩訶」は「大きい」、「般若」は「智慧」、「波羅蜜多」は「彼岸に渡る」、「心」は「心髄」、「経」は「経典」の意味で、人類の知恵が凝縮されています。その中で、此岸（現象界）の五大要素を「五蘊（ごうん）；色受想行識」とよんでいます。「受」は感覚、「想」は感情、「行」は意志、「識」は判断という精神的作用で、まとめて「心（ココロ）」とよんでいるようです。唯識という発想は、うたかたの「心」（幻）を超越したところにある境地のように思いますが、釈迦も五蘊に執着することのない心境になってはじめて、完全な精神的自由を得られると説いたといわれます。特に、「色」は物質および肉体（モノ）を意味しますが、それも超越することを勧めています。「色即是空」「空即是色」という言葉がありますが、「空」を「まだら」で観ると多くの共通性を見出すことができます。華嚴哲学の事事無礙法界（じじむげほっかい）も、目には見えぬ無限の絆の糸が時空を超えて結ばれている「まだら」のイメージで捉えられます。死生観はさまざまかもしれませんが、たとえば、「俱会一緒」という真宗門徒のような願いも時空に反響して心の世界を変革していけそうに思います。

「菜根譚（さいこんたん）」という中国の明代末期（万暦八年）洪自誠（こうじせい）によって著された中国の古典は、「論語」と並んで広く読まれ、その中に「言多意遠（言多く意遠し）」というのがあります。ディベートや批判精神が

教育にも取り入れられようとしています。知情意のバランス（シンメトリ感覚）からいえば、地の部分が多い「不言実行」という美德に対して、社会を支えている人々への敬意を表したいと思います。また、「山高水長」と対比し、「情深意遠」という言葉も情報の迷い路から抜け出すために常に考慮に入れておくべき事柄でしょう。ズームを引いてみると、ちょうど千と千尋の神隠しででてきた湯屋のように、釜爺や従業員が社会システムを支えてくれています。

知は、人間学の主要なテーマで、教養として、知のシリーズ（技法、論理、モラル）の循環が話題となりましたが、広義の知（情報）の5段階というのも参考になります。それを列挙してみます。

1. データ（data）
2. 狭義の情報（information）
3. 狭義の知識（intelligence, knowledge）
4. 知恵（intellectual, wisdom）
5. アフォーダンス（affordance）

広義の情報のカタチは、文字コードから単語、文章、文脈、メタファ（隠喩）へとより動的に柔軟に、扱える情報量を増やしています。パソコンのインタフェースも文字（CUI）から絵（GUI）に移行し、さらに人に優しいマルチメディアで、感覚と知覚に訴えるようになってきました。4や5は、経験から学ぶことも多い言葉になりにくい高次の情報ですが、ヴィゴツキーのこのような社会的構成主義も参考になることが多く、本物性（authenticity）、足場かけ（scaffolding）、ネットワーク（network）、内省（reflection）を取入れた情報環境の構築が、保育者・教育者にも課題になっています。デジタルポートフォリオとよばれていますが、記憶をメディアに残し、改善や思い出につなげる取り組みも緊急性を帯びています。記憶は脳の大き

な要素ですが、パノラマや声は時空を越えて、我々の存在の意味も語りかけてきます。時代は一庶民、一教師が自分史を含めた共同作品を残せる時代になったのです。

関連して、情報教育関連で、メディア論というものがあります。最近では、パソコンで視聴覚関係を取り扱うのも簡単になり、個人レベルで教育や生活文化に活用することができ始めました。文部科学省もメディア（メッセージ）リテラシの育成をはっきり打ち出してきています。情報教育のポイントは、「わかる、つくる、つかう」（理解、実践、参画）などの表現がされていますが、特に3つ目の「つかう」（参画）はメディアと大きなつながりがあり、各教室にプロジェクトが配置されたような最近の出来事はそれと対応しています。たくさんの眼で1つの出来事をデジタルビデオカメラで取材し、このプロジェクトで披露しあうと、いろいろな学び合いができます。そう考えた原因を探究する中で、まだらなカタチの中に、ひとつの調和、横断性とよばれる共通のパラメータを発見していくことができます。観世音とか観自在は、「観」の境地と言われていますが、一色でなく、多重思考訓練でまだらを感じ、さらに絶妙の間をコントロールできれば最高です。

間は、同時に「曖昧」、「微妙」、「みだら」などの迷い路も与えます。「冷静」と「情熱」の相剋（そうこく）を克服する路は、「そのまま」、「ケ」、「愛」、「清い」、「聖」、「美」、「玄」、「慈悲」などで表現されてきたカタチを信じ、托すことだと思います。陰陽五行説の相性（そうせい）の説明を参考にすると、金水木火土の循環の順は、相生（そうじょう）とあって、相性がよく発展していきますが、自然界のバランスは、火は水で消え、水は土に吸収され、土は木で被われ、木は金（属）で切られ、金（属）は火で

溶かされる、相剋（そうこく）という押さえも用意しています。木は生命（現象）や色と考えることができます。火は、光や風にも通じ、今流に言えばメディアがそれに当たります。このメタファの教えるところは膨大で、発想の源になりますが、たとえば、次のようになります。

金のように陳腐化し硬直した知識は、ネットワークのメディア（火）に圧倒される。また、火の暴走は、弛まない流動的な道具（水）の活用によってバランスがとられる。大地（土）は木（生命、人工物）に養分を吸い取られるが、木は火によって土に帰る。誤解してはいけないのは、相剋は、バランスの安全装置であり、むやみに流れに抵抗するのは、ドン・キホーテのような時代錯誤であるという認識です。

最後の土と木の関係は、メディア論にとっても極めて示唆的です。木という図ももとは、土（大地）という地があつてこそ生まれたもの。我々のルーツは土だということをいっています。そういえば、宮崎駿作品で、ナウシカやシータが、「我々は土を離れては生きていけない」、といった言葉が環境問題の解決策を示しているようにも思います。ディープエコロジーやエコフェミニズムの発想の由来も大地の母性に回帰するものと考えられます。生きつづけるヒントは火によって、土に帰るということです。ナウシカの巨神兵のような人工の火によって土に戻るのはごめんですが、現代は危険がいっぱいです。とはいえ、この間を断絶（壁；カタストロフギャップ、段差）にすることはできません。

これに関して芸道でいい言葉があります。能の観世の教えの「秘すれば花（風姿花伝；花伝書）」は流石幽玄を感じさせます。型として土と断絶した瞬間に死（ケ枯れ；穢れ）が始まっています。切り花には水さえやればいいのか、造花でいいのか、単なる飾り物に高い金額をつけ

たりするのは、既に眼を侵されている観を持ちます。間狂言とか朽ち葉を添えとか、さりげなく用意された機会に、気配を感じ風流を解す子どもがいても、それは一生の宝になると考えます。

子どもの目線に立て、とよくいわれますが、教員や親は、子どもと大人の間に存在する境界（発達の最近接領域）を自由に行き来できる人であってほしいものです。また、「風をよむ」とか、「風になる」といった理想（夢）と現実を豊かにつなぐ存在であってほしいと思います。

5. まとめ

杉本は、「マダラはマダラを目指し、マダラを嫌う」という言葉で「観」をまとめました。

我々のどこかに憧れのような聖なるものとの同一化願望があります。常にそれを目指しつつも常に未熟であるということも納得し、指の間の細胞が死んで指の機能を発揮できる（アポトーシス）ように、入植キメラはやがて排除され、胎児が分娩されるように、我々は自己と非自己の間で繰り広げられてきた継承の営みに身を委ねる掟になっているようです。

しかし、まだら観は、既に1.はじめにで書いた疑問にちゃんと応えてくれています。同じなのは我々のルーツ、オンリーワンの違いは単に今見えているカタチで、実は真実や正義もそう。幸福や生きる意味は、愛（welcome、有り難い、奇蹟）に回帰すれば蘇ってくること。目に見えなくても、気配でその存在を信じられます。

また、2.まだらの定義でわき起った疑問もある程度解消されます。我々の前にはいろいろな選択肢があり、特に政治や人生の岐路では、選択に迷います。そんな時、実行してみるといいことは、少し視線をずらしてみる、友達やまわりの意見も聞いてみる、インターネットで調べてみるなどです。そうすれば、先入観に囚われない虚心坦懐なカタチ（まだら）の発見に役立ちます。「夢は叶う」と思いつづけ努力して、はっきりしたカタチにしていく。ジグソーパズルの欠けた相手かぎピースを探す。相手のパソコンのデスクトップフォルダのように、相手に映った自分を観る（通信；コミュニケーション、交わる、つなげる）。時場所場合（TPO）に合わせて臨機応変に様態を変える。なども、有効です。

まだらは、みだらに溶けあって収拾できなくなったり、はぐらかすのではなく、肺や腸の襞（ひだ）や根毛が地との接触面積を増やそうとフラクタルな努力をつづけているのと同様に、地と図の反転（斑点）への真摯な願望も、宇宙への回帰路の一つのカタチ（痕跡）かもしれません。夢はつまり思い出の後先（井上陽水；少年時代）、夢の郷・イーハトーブ（宮沢賢治）、たとえサヨナラでも愛してる意味（中島みゆき；誕生）。など、気づけばいろいろな所で、まだら観によるコーチング文化は、生きる力のサイクルを活発化し、励ましの発信をし続けているようです。教育も、土に降った養分を含む慈雨（水）を金（知識）のフィルタで水に戻し、木を育むまだらな営みと情報は伝えています。